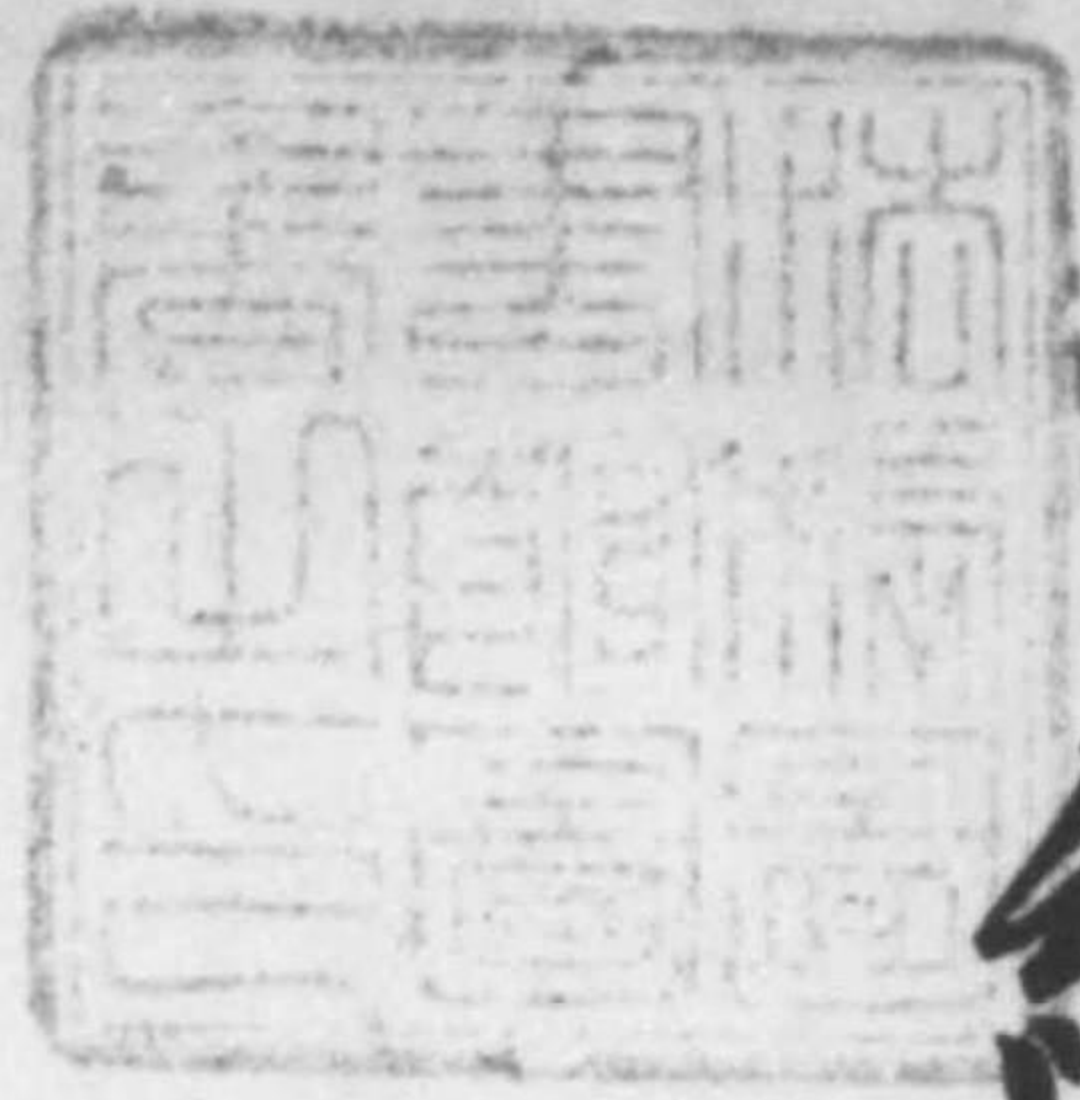


國憲論綱

上



細川之助氏



款暖猶寒節序遲朝：屈  
指數花期：未到意先  
到為賦墨江春色詩  
待花代國憲論綱之序  
戊寅十一月東洋學



B210  
105  
2a



国憲論綱卷上

東京 小野 梓 撰

第一章 其不審ナルニ係ラス国憲ノ文字ヲ  
用井ル趣意 国憲ノ意義 其必用ナル所  
以 泰西ニ国憲ノ起リシ略史ニ其醜態  
本邦立憲ノ萌芽ニ其發生ノ義 本邦  
ニ立憲ノ想像ノ進歩シタル證 国憲設置  
ノ機會 国憲ヲ必行スルニ第一ノ要具  
附リ裁定ノ意義

普通ノ意義ニ據リ廣ク国憲ノ文字ヲ解スレハ



即今國法ノ謂ニシテ所有ニル國ノ法度ハ其ノ  
其名ヲ負ヒ特リ政法ノミナラス刑法民法軍法  
海法賞法治罪法訴訟會計法ノ如キモ皆其中  
ニ數フヘキモノナリト魯氏茲ニ余カ所謂ル國  
憲ナルモノハ特ニ英語ノ「コンスチテュション」  
即チ政法ノ義ニ充ル者ニシテ其範圍殊ニ狭シ  
抑モ「コンスチテュション」ナル英語ハ大本基礎  
等ノ知語ヲ用キ直譯スヘキモノニシテ英人ノ  
之ヲ用キテ政法ノ義ニ充ルセシモノハ主  
治者ノ關係ハ人世ノ活度ニ於テ尤モ大切ナ

ルモノニシテ其必用ナルハ他ノ諸法ニ超越シ  
他ノ諸法ノ善惡ハ此法善惡ニ依ルモノ多ク民  
權ノ存亡ニ此法ノ如何ニ依リハナリ故ニ之  
ヲ漠然義譯シテ國憲ト謂フハ寧ロ廣シ<sup>汎</sup>涉リ頗  
ル不當ナラザルモノナリ然リト魯氏近時譯述  
ニ從事スルモノ多ク之ヲ用キテ之ヲ義譯シ慣  
用ノ久シキ自然普通ノ意義外ニ別義ヲ生シタ  
ル形ニシテ終ニ世人モ國憲ト云ハハ所謂ルコ  
ンスチテュション即チ政法ノ義ナル事ヲ認  
ルニ至リ故ニ余ハ今其不當ノ譯語ナルニ<sup>係</sup>



ハラス國憲ナル邦語ヲ用キヨシスチ、ユシヨ  
ニナル英語ヲ換メント欲ス蓋シ言語ハ想像ノ  
表ニシテ文字ハ言語ノ代役ナシハ苟シクモ國  
憲ノ文字ニシテ政治ノ想像ヲ世人ニ示ス事ヲ  
得ハ充分ニ言語文字ヲ用井ル所以ノ目的ヲ成  
就スルニ足り実ニ新造ノ文字ヲ用ヒ世人ノ解  
譯ヲ混雜セシムルハ穩當ノ措置ニアラサルヲ  
知シハナリ

國憲即チ政治法ハ一ニ大本ノ法ト謂ヒ頗ル重々  
シク説キタリト云ヒ其本質ニ分ケ入り仔細ニ

味スシハ是シ至治者ノ職分權理ヲ明示シ其暴  
政非治ヲ防禦シ被治者ノ安堵ヲ謀ル者タルヲ  
知ル故ニ平易ニ其意義ヲ解ケハ則チ役人ノ職  
制章程ナリ至治者被治者ノ約束ナリト謂フ可  
シ  
然リ而シテ泰西人ノ往々之ヲ大本ノ法ト敬重  
尊崇シ競ヒ民刑ノ諸法ヲカラシムルモ此法一  
日モナカルヘカラスト迄テ極言スルニ至ル者  
ハ畢竟至治者被治者ノ關係ハ民人相互ノ交通  
ニ比スシハ其利害ノ繫ル所頗ル著大ナル者ア



シハナリ何ソヤ曰ク国ニ民刑等ノ諸法ナキト  
キハ保護ノ器械ヲ欠クカ為メ民人タルモノ其  
権理ヲ保有スル自カラ難キモノアルヘシト若  
比究竟斯等ノ場合ニ於テハ数人ノ利益ヲ擧テ  
数人ノ犠牲ト為スニ過キス一人一箇ニ就テ之  
ヲ論スレハ彼我常ニ相互ヒノ地ニ立テ我ヲシ  
テ尚ホ平等對頭ノ権理ヲ得ルノ望アラシク國  
ニ國憲即チ政法ノ設ケ無キトキハ則チ否ラス  
蓋シ此場合ニ當リテハ多数ノ利益ヲ放テ少数  
ノ侵掠ヲ任スモノニシテ自治者タルモノ若

シ徳義ノ良心ヲ以テ其侵掠ヲ為スナリハ被治  
者ノ大幸ナリト云氏苟モ之ニシテ不徳ノ惡念  
ヲ懷キ其治國ノ権柄ヲ弄ハントナレハ海陸軍  
警裁判所等ノ如キ當テ民人保護ノ器械タリシ  
者皆彼力逞暴ノ器具ト變シ其禍害ノ大ナル相  
互ニ侵掠ヲ為ス時ノ比ニアラズ被治者タルモ  
ノ徃々其奴隸ニ打テ為サレ財產所有等ノ権理  
ハ愚カ其生命タニ自治スル事能ハサルニ至レハ  
ナリ加之他ノ諸法ノ善惡尚々自治者ノ良否ニ  
依ルモノ有リテ國憲ノ子ル所頗ル大ナリ故ニ



之ヲ設置シ主治者ノ職分權理ヲ明示スルハ唯  
リ主治被治ノ關係ヲ正スノミナラス又以テ被  
治者相對ノ交通ヲ正スヘキモノタルヲ知ル果  
シテ然ラハ國憲ノ社會ニ必用ナル明々燦々又  
疑フヘキ者アラザンナリ

既ニ前段ヲ叙シ了リ眼ヲ注テ泰西ノ各土ニ國  
憲ノ起立セシ事情ヲ顧ミ之ヲ本邦ニ國憲ノ突  
生セル有様ニ比較スルニ余ハ讀者ト共ニ顔ヲ  
笑テ大ヒニ賀スヘキ一快事アルコトヲ見出し  
タリ

按スルニ泰西ノ各土モ昔ニ政府ト名クヘキ者  
ノ現シタル始ハ他ノ諸大洲各土ト均シク強族  
自カラ主治者ノ地位ヲ占メ其近傍ノ弱小ナル  
種族ヲ苛ク支配セシモノニシテ追々文明ノ度  
モ進ニ或ハ邦ヲ立テ或ハ都府ヲ建ルノ地位ニ  
至リシ後モ尚ホ往昔ノ餘威ヲ藉リテ自僭ナル  
政事ヲ為シ馴致耶獲紀元第十八年紀ノ下第ニ  
至リ依然被治者護衛ノ權柄ヲ弄ヒ他ノ權理ヲ  
害シ己カ職分ヲ忘ル者多シ然ルニ其非政弄  
權ノ深甚ナル過々以テ民人自治ノ心ヲ刺衝ス



ルニ足リ此ノ年紀ノ前後ヨリシテ政府設置ノ  
想像漸ク歐米兩洲ノ間ニ進ミ以テ米洲聯邦ノ  
独立ヲ釀成シ編定ノ國憲始メテ立ツニ至シリ  
踵テ佛蘭西ノ革命伊英亞ノ立憲等アリテ泰西  
政治ノ有様今日ノ盛ナルヲ致セリ特ニ英島ノ  
如キハ自治ノ想像夙ニ民人ノ間ニ進歩シ「ゲヨ  
」ニ王「マ」ガ「ナ」カ「ク」ク、後漸ク參政ノ權理ヲ民人  
ニ分与シテヨリ次第ニ其歩武ヲ進メ今日アル  
ニ至リ其國憲ナルモノ未ダ編成ノ完全ヲ及ベサス  
ト云氏其大体已ニ被治者ノ腦漿ニ點印シ主治

者ヲシテ又之ヲ弄用スルヲ得サラシム是レ泰  
西ニ國憲ノ起リシ畧歴史ニシテ之ヲ歲々書キ  
綴ラントナラハ數十ノ冊子ト許多ノ歲月ヲ費  
サ、ルヲ得サルモノナリ然リ而シテ余ヤ今史  
書ニ就キ其起リシ時ノ有様ヲ察スルニ大抵主  
治者壓抑ノ苦ニ堪ヘス被治者タルモノ其結合  
ノ腕力ヲ振ヒ自治者ト争闘シ以テ之ヲ成就ス  
ルモノ多ク其中十數條ノ國憲ヲ要ムルカ為メ  
千斛ノ鮮血ヲ流國憲ノ腥ヤ尋數万里外ノ日本  
ニ聞ユルモノアリ其跡ノ醜態不祥ナル識是勢



力ノ世界ニアリテ之ヲ見レハ譬ヘンモ又事物  
ナキモノナリ然ルニ本邦ニ頃口狂暴ノ議者ア  
リテ自由ハ鮮血ヲ以テ買フヘキナト唱フルモ  
ノアリ斯ハ不平ノ私憤ニ堪ヘス一時故サラニ  
過激ノ言ヲ造リ自カラ漏スモノナルヘシトモ  
此苟モ斯等不祥ノ語ヲ唱ヘ本邦ノ自由モ亦夕  
醒カラシメント<sup>歎</sup>スルモノアラハ余ノ如キ奥成  
ニ自由ヲ愛スル輩ハ頗ル心ニ慊カラサルモノ  
アリ嗚呼邦人ヨ汝ノ自由ハ鮮血ヲ以テ買フヲ  
用キス腕力ヲ以テ争ヲ用キス唯汝ヲ識力ヲ竭

シテ之ヲ求メヨ吾ラサレハ汝ノ自由モ亦泰西  
ノ醜態不祥ニ倣ヒ醒カルヘク豈ニ悲シマサル  
ヘケン哉

前段ノ末ニ説キタル如キ狂暴ノ議者アルニ係<sup>拘</sup>  
ハラス本邦立憲ノ萌芽ハ最モ美妙ナル勢ヲ以  
テ既ニ發生シ未シリ是レ余カ読者ト共ニ外ハ  
泰西人ニ對シ之ヲ伐リ内ハ自カラ賀シテ未タ  
止マサルモノナリ今大實ノ遺令等ニ依リテ之  
ヲ考フルニ中古王室ノ盛ニナリニ頃ハ八省彈  
臺使寮司等ノ設ケアリ各々其職制ヲ建テ其官



夫ノ職務責任ヲ明示シ稍々國憲ニ類セシモノ  
アリト云々畢竟是レ君主ノ其政權ヲ下民ニ施  
ス為メ己レカ臣隷ヲ促責セントト歎之ヲ設ケ  
シモノニシテ寧ロ自治者ノ長々人者其屬隷ヲ  
約束スルノ趣意ニ出ルモノ多ク未ダ主被西治  
者ノ相ヒ約束シテ被治者ノ安堵ヲ謀ルカ如キ  
開進ノ想像アラサルナリ故ニ中古至治ノ時ト  
云々立憲ノ想像ハ日本國民ノ腦裏ニ寓セシコ  
トナシト云モ太々過言ニ非ラサルナリ況ンヤ  
降テ相家武門專横ノ時ニ至リテハ主被關係ノ

不當ナル間々筆スヘカラサルモノ多シ斯ノ際  
豈ニ所謂ハ立憲ノ想像ナルモノアリテ本邦ニ  
存セシヤ曰ク然ラハ邦人何ノ時カ始メテ立憲  
ノ想像ヲ起セシヤ曰ク立憲ノ種ハ維新ノ前後  
自由ノ想像ト共ニ海外ヨリ来リ其之ヲ培養シ  
僅ニ十年未滿ニシテ萌芽ヲ充分ニ出サシメタ  
ルモハ實ニ明治維新ノ御誓文廢藩置縣ノ號  
令八年四月十四日ノ明詔同年六月十四日ノ詔  
及ヒ旧參議諸老輩ノ建議等ノ力ナリ今按スル  
ニ維新ノ誓文ニハ唯々廣ク集議ヲ詢ヒ万機公



論ニ味ストノミアレハ之ヲ速了シテ立憲ノ萌  
芽ヲ培養シタルモノト断言シ難シト然レハ八年  
四月ノ大詔同六月ノ詔ニ維新ノ誓文ヲ擴充シ  
云々ストアルヲ以テ之ヲ推セハ夫ノ御誓文モ  
立憲ノ一肥料タルコト明白ニシテ疑フヘカラ  
ス廢藩置縣ノ號令ハ国力分裂ノ大弊ヲ醫シタ  
ルノミナラス又我カ士民ヲ放テ奴隸ノ軛ヲ脱  
シ自由ノ一部ヲ得セシムルモノト謂フヘクシ  
テ其自由ノ根幹ヲ養肥セハ余カ深ク信スル所  
ナリ其故如何トナレハ廢藩置縣ノ前ニ當リテ

ハ士民大地諸大名ノ屬隸タルカ故ニ毎ニ主人ノ  
意想ヲ以テ氣儘ニ支配セラレ其実境世ノ所謂  
ハ奴隸タルヲ免レサレハナリ今試ミニ其証左  
ノ一二ヲ挙ケシニ士民ハ嘗テ財產持有ノ權利  
ナク運行婚姻等ノ自由ナク甚シキニ至リテハ  
其生命スラ尚ホ且ツ主人ノ生殺ニ任セタルニ  
非スヤ故ニ余ハ嘗テ廢藩ノ大舉ヲ稱シテ我カ  
敵聖ナル明治文武皇帝ハ久シク我カ国力ヲ分  
セシ封建ノ惡制ヲ廢絶シ同時ニ八百年來本邦  
ニ存在シ其體面ヲ汚シタル奴隸苦役ノ醜風ヲ



洗滌シタル雙義事アリト謂ヘリ八年四月ノ大  
詔及七同年六月ノ詔ハ詔詔自カラ立憲ノ肥料  
タルヲ証シ新クニ表示ヲ作ルヲ要セス故ニ余  
ハ今其全文ヲ左ニ掲載スルノ自由ヲ得ント歟  
又四月十四日ノ詔ニ曰ク朕今擴充誓文之意設  
元老院以廣立法之源置大審院以鞏審判之權又  
召集地方官員以通民情因公益歟漸次立國家立  
憲之政体与沙衆庶俱賴其慶沙衆庶莫泥旧慣故  
又或莫輕進急為其能体朕旨翼贊焉六月十四日  
ノ詔ニ曰ク朕踐祚之初誓神明漸次擴充其旨召

集全國人民代議人以公議輿論定律法開言路歟  
使人民各安其業知以擔國家之重義務故先召集  
地方官員代人民公議ト曰參議諸輩ノ建議ハ言  
尚々過激ニ涉リ立論或ハ其當ヲ失スルモノアリ  
リト云凡要スルニ立憲ノ萌芽ヲ成長セシメタ  
ル肥糞ノ一ト為セサルヲ得ス之ニ加フルニ民  
術ニ於テハ近時西洋事情立憲政体畧等ノ著述  
アリテ其萌芽ヲ培養セリ以上叙スル所ノモノ  
ニ孰キ深ク具有様ヲ考フルニ本邦ノ國憲ハ寧  
口至治者ノ首唱ニ出芽スルモノ多ク其成長ス



ル実ニ主被相依ノ力ニ由モノナリ果シテ然リ  
故ニ本邦立憲ノ萌芽ハ今ニ至ルマテ温良ノ有  
様ヲ以テ成長シ吾人ヲ以テ向來泰西ノ如ク主  
被相ヒ争ヒ鮮血ヲ以テ國憲ヲ醒カラシムルノ  
恐シナカラシム吾人ハ豈之ヲ知ツテ自カラ賀  
セサラシヤ若シ其有様ヲシテ始終ヲナラシメ  
ハ寔ニ賀スヘキモノナリ

羨妙ニ立憲ノ本邦ニ萌芽<sup>芽</sup>ル所以ハ既ニ前段ヲ  
以テ充分ニ説キ尽セリト信スレハ余今速説ノ  
歩武ヲ進メ立憲ノ想像ハ如何ナル進歩ヲ本邦ニ

為セルヤヲ簡易ニ吟味スヘシ余依テ依頭シテ  
之ヲ考ルニ初ノ程ハ其退歩ノ色アルヲ覺ヘ稍  
驚キタリト云ヒ再ヒ之ヲ検査スルニ及ンテ嚮  
ニ余カ退歩ト認メシモノハ却テ是レ進歩ノ證  
左ナル事ヲ見出シタリ抑モ一事一物ヲ突見シ  
其未タ世間ニ周知セラレサル間ハ左モ珍ラシ  
ク唱和スト云ハ一旦社會ニ周知セラレ人々皆  
之ヲ言ヒ自カラ平常ノ事ト成リ新奇ノ觀ア  
ラサレニ至リテハ之ヲ唱和スルモ大人氣ナク  
思ヒ自然ニ之ヲ止ムモノハ人情ノ常ニシテ近



未本邦ニ立憲ノ事ヲ唱和スルモノ希ナルハ蓋  
シ之ヲ以テスルナルハ故ニ突然其外見ヲ視  
ハ立憲ノ想像或ハ退歩ノ形アリト善凡人情ノ  
常ヲ推テ細ニ其内状ヲ察スレハ唱和ノ声ノ今  
日ニ止ミタルハ立憲ノ想像ノ世ニ周知セラレ  
タル所以ナルヲ知ルヘキナリ之ニ加フルニ始  
メ立憲ノ唱和盛ニナルニ當リテヤ唱和スル者  
ノ中眞成ニ被治者ノ安堵ヲ望ニスルノ心ニ出  
ス唯夕之ヲ藉テ一時ノ私憤ヲ漏スモノアリ故  
ニ彼ノ輩ニシテ既ニ其所ヲ得漸ク憤怨ノ晴ル

ハアラハ最早立憲ニ求メナキカ為メ必其唱和  
ヲ止ヘシ是亦夕立憲ヲ唱和スルノ声ヲ今日ニ  
減シタル一因ニシテ余ヲ以テ之ヲ見レハ之ヲ  
以テ立憲ノ想像ヲ退歩セシト為スヘカラス其  
故如何トナシハ饒ヒ若シ斯輩ヲシテ唱和ノ德  
ヲ今日ニ全フセシムルモ立憲ノ唱和ヲ為ス者  
ノ正義ヲ為スニ際シテハ到底彼ノ偽唱和家ヲ  
除削セサルヲ得サル者ナレハ之カ為メ國憲ノ  
想像ノ雲ヲ進歩シタルカ如キモノハ唯其假裝  
ニシテ其実進歩ニ非サレハナリ吁々既ニ之ニ



依テ之ヲ進ムルナシ豈又之ニ依テ之ヲ退クル  
ノ理アラレヤ余ハ寧ロ之ヲ稱シテ其腐敗ノ部  
分ヲ截断シ新鮮ノ部分ヲ全スト謂フトセリ  
本邦國憲ノ萌芽ハ彼ノ如ク義妙ニ發生シ其進  
歩ハ此ノ如ク夫レ明ナリ是吾人カ海外千古未  
曾有ノ義ヲ今日ニ專ラニスルモノニシテ蓋シ  
自カラ賀スヘキモノナリ然ト雖モ古今宇内ノ  
歴史ニ執テ之ヲ徵スルニ主治者被治者ノ相  
投合スルハ常ニ希シニシテ其乖離スルハ常ニ  
多クシハ今日本邦ニ主被相投ノ義アルモ之ヲ

今載ノ後ニ期スヘカラサルヤ必セリ故ニ余ハ  
此際會ヲ時トシ難ナリ國憲ヲ設置シ其義ヲ千  
載萬祀ノ後ニ全フセシ事ヲ望ムヤ頗ル切ナリ  
然ルニ世ノ論者尙々或ハ尚早ヲ以テ國憲ノ設  
立ヲ拒ムモノアリ斯ハ本邦民人ノ有様ニ執キ  
皮相ノ看ヲ下スノ謬誤ナルノミ  
前段ニ述ヘタル吾人ノ冀望ハ早晚ノ中充スヲ  
得ルノ景況アレハ余ハ更ニ論述ノ地歩ヲ進メ  
國憲ヲ必行スルニ被治者ノ剛毅正直ニシテ之  
ヲ固執スルノ能力アルヲ要須トスル所以ヲ説



キ去ルヘシ氏ヲ諸法ノ必行シテ能ク其目的ヲ  
達スルヲ得ルモノハ特リ之ヲ維持スルモノア  
リテ其裁定ヲ為スニ由ルノ故ニ法ニシテ若  
シ其裁定ノ法方ヲ欠カハ法其要具ヲ失フカ故  
ニ終ニ法タルノ用ヲ為サハナリ今按スルニ  
民刑以下諸法ノ如キハ其充用專ラニ被治者ノ  
邊ニアレハ主治者タルモノ能ク之ヲ維持シ其  
裁定ヲ為スト故凡夫ノ國憲ニ至リテハ主  
治者ノ身上ニアレハ之ヲ維持シ其裁定ヲ為

スモノ自カラ他ニ在ツテ存セサルヲ得ス是シ  
被治者ノ剛毅正直ニシテ國憲ヲ固執スルノ能  
カラ要スル所以ニシテ其能力コソ實ニ之ヲ維  
持シ其裁定ヲ為スモノナリ故ニ被治者ニシテ  
若シ其能力ヲ有スル<sup>微</sup>ニシテ國憲ヲ設置  
シ明クニ之ヲ書載スルモ主  
治者ノ錯用弄權ニ  
當リテ之ヲ争フコト能ハザルカ為メ國憲タル  
モノ能ク其効用ヲ奏スルコトナカルヘシ之ニ  
及シ被治者ニシテ充分ニ其能力ヲ有セハ  
國憲ノ國憲ナカラシムルモ必ス人道ノ大本ト



古来ノ慣例トニ依テ主権者ヲ刺衝スルヲ得ハ  
必ス其擅横ヲ防クヲ得ヘシ余実ニ世人ノ熟知  
セハ英佛ノ事ヲ以テ前言ヲ證ス是ヲ以テ被治  
者固執ノ能力ヲ培養スルハ立憲ノ國出ニ於テ  
尤モ務ムヘキノ急ニシテ國憲ノ必行一ニ之ヲ  
恃ムノニ笑

余ハ今因ニ裁定ノ意義ヲ畧叙シ此首章ヲ終ル  
ヘシ裁定ノ文字ハ英語ノ「サンクシヨ」ヲ譯填  
シタルモノニシテ懲罰ノ義ヲ帯ルト云ヘ凡單  
ニ懲罰ト云ヘハ唯リ刑法ノニニ盡シ民法上ニ

在リテ條約必行ヲ公ニ督促スルモノ政法上ニ  
在リテ役人ノ免黜ヲ為スモノ等ヲ含蓄セリル  
カ故ニ別ニ此ノ文字ヲ用井以テ識別ス



十四卷十一

第貳章

國憲設立ノ大端旨 詳説

最多衆

ノ最大安樂即チ真利 真利ノ意義 真利

説ノ泰西ニ行ハレシ畧史附チ真利説ノ既

ニ由細由ニ行ハレシ事 真利ノ所存即チ

人生ノ四大事 治度富周安固平等ノ意義

四大事ノ關係美ニ安固ノ最大要タル所

以 大端旨ヲ得ルノ方途 官職應當ノ三

原素即チ德義聰明勉 聰明ノ二別即チ

学識果斷 主治者ノ德義ヲ勸ムルノ要則

附ノ責任ヲ尽サシムル術 主治者ノ聰明



通勉ヲ勸ムルノ要則 國憲ニ徧入スヘキ  
緊要ノ事項

國憲設立ノ大端旨ハ既ニ第一章ニ於テ畧説セ  
シモノアリトモ今又英ノ碩学ベント山翁ノ  
所説ヲ取り試ニ之ヲ説ニニ實ニ最多衆ノ最大  
安樂ヲ謀ルニ在リト云ヘリ僅々ノ語句頗ル遠  
大ノ意味ヲ含ミ深ク之ヲ弄味スルニ非ラサレ  
ハ能ク真奧義ヲ知ルヘカラスト當今少ラク  
他ノ語詞ヲ用井試ニニ之ヲ譯解スルニ即チ國  
憲ヲ設置スルハ主洛者ノ權理義務ヲ畫限定置

レ以テ社會一般ノ真利ヲ謀ル為ナリト謂フヘ  
キモノ、如シ然リ而シテ此解語尚ホ單簡ニ過  
キホタ明解スヘカラサルモノアルハ余ハ更ニ  
一步ヲ進ニ社會一般ノ真利即チ最多衆ノ最大  
安樂ハ如何ナルモノニシテ何等ノ所ニ存スル  
モノナル歟ヲ吟味スヘシ

真利ノ文字ハ英語ノ「ユ」ナリナシヲ譯スルモ  
ノニシテ善アリテ惡ナク苦ナクシテ歡あり若  
クハ歡樂善根ノ多クシテ苦痛惡事ノ少ナキ称  
ナリ然リ而シテ此語ハ邦語ノ和字ノ如ク侯用



如何ニ依テ其弊ヲ致スヘキモノナレハ之ヲ  
避シカ爲メベレタム翁ハ自カラテ語詞ヲ制シ之  
ヲ最多衆ノ最大安樂トハ云ヘリ故ニ真利トハ  
社會公同ノ利益ヲ云フモノナリト知ルヘシ  
按スルニ西洋ニ在テハ希臘ノ學者「ピキユロ  
スナルモ」始メテ真利ノ說ヲ唱ヘ漸ク羅馬ノ  
時ニ盛ナリシト云凡其說ク所口ノ未タ全備セ  
サルト天造說ノ盛ニ歐洲ニ行ハシタルトニ由  
テ耶穌紀元第四年紀ノ頃ニ至リ之ヲ唱フル者  
次第ニ減少シ十有餘年ノ後「ベレ」翁ノ之ヲ

英島ニ再唱スルマテハ殊ニ其衰微ヲ極メタリ  
ベレ翁ハ夙ニ其思想ノ能力ヲ以テ真利ノ  
說ヲ再興シ更ニ其說ク所ノ改良修鍊ニ苦痛歡  
樂ノ分析ヨリシテ獨善愛憎ノ二偽旨ヲ排撃ス  
ル等其力ヲ尽シテ餘蘊ナク弥兒父子前後之ヲ  
賛成シ壞斯陳德門及ヒ歐洲大陸ノ諸名家隨テ  
唱ヘ祭然觀ルヘク其勢駸々乎トシテ又タ犯ス  
ヘカラス終ニ泰西有識ノ輩ヲシテ德義政治ノ  
要旨ハ真利ノ外ニ求ムハキモノナシト云ハシ  
ムルニ至シリ我カ亞細亞ノ東部ニハ孔子始メ



乎ニ利ヲ説キ後世徳義政治ヲ謂フモノ常ニ之  
ヲ説ク屑トセス往々異端以テ之ヲ賤メリ政治  
上ニ在テ管仲李悝ノ徒徳義上ニ在テ老子莊子  
ノ輩時或ハ真利ノ説ニ似タム者ヲ唱ヘシコト  
アリシト孟子彼ハ愛憎ヲ以テ本位トシ此ハ猶善  
ヲ以テ本位トスルモノナレハ之ヲ称シテ真利ノ説  
ト為シ難シ説キモノ純無ク實ニ樂ムル者也然レテ其西都元印度ハ真利  
治上ニ行ハレシヤ吾ハ余未タ其言ヲ聞カスハレ  
シヲ見ツヘキモノアリ斯ハ実ニ釋迦ノ卓識ニ由  
テ然ルモノニシテ諸經中毎ニ自利々他ヲ説ク

モノハ是レ之ヲ説キ之證拠ノ著明ナルモノナ  
リ今余ハ一々佛説ノ真利ニ関セルモノヲ挙ケ  
真利説ノ既ニ亞細亞地方ニ行ハレシコトヲ充  
分ニ明ルセント欲スレト斯ハ本篇著作ノ旨ニ  
アラサレハ少ラク之ヲ畧シ真利ノ所存ナル人  
生ノ四大事ヲ説キ去ラサルヲ得ス  
人生ノ四大事トハ治度富国安固平等ヲ謂ヒ人  
ノ能ク生命ヲ保テ歡樂ヲ全フスルモノ一ニ之  
ニ是レ依ルモノナリ故ニ社會ノ真利ハ之ヲ全  
フスルノ多寡ニ應ジテ進退シ之ヲ全フスルノ



多キハ真利ヲ進メ其寡キハ之ヲ退クルモノト  
ルヲ知ルヘシ是ヲ以テ夫ノ四大事ヲ做得来ル  
的ノ高度ニ全スルハ政治ノ大要ニシテ諸法設置  
ノ大端皆皆ナ茲ニ在モノナリ夫レ然リ是ニ於  
テ余ハ夷ニ國憲ヲ設置スルノ大端皆ヲ再説シ  
実ニ有衆ノ活度富周、安固平等ヲ全フスルヲ謀  
ルニ在ト云フ

生存トハ吾人ノ生活スルヲ得ル所以ヲ云ヒ富  
周トハ吾人ノ富饒ニシテ豊有ナル所以ヲ云フ  
抑モ生存ハ吾人ノ在世ニ取テ最モ切ナルモノ

ニシテ苟モ其方術ヲ得サル時ハ飢寒交々至リ  
死滅ノ外又他アラザルナリ是レ性理ノ吾人ヲ  
強逼シテ東奔西走拮据止マサラシムル所以ニ  
シテ之ヲ得ルト得サルノ界ニ於テハ吾人ノ有  
様夫レ亦憐愍スヘシ富周ハ吾人ノ抑リテ以テ  
之ヲ樂ミ又以テ飢寒ヲ免ルモノ一大保管ナシ  
ハ吾人カ在世ノ有様ニ於テ少クモ又ヘカラ  
サルハ世人ノ熟知スル所ナリ然リトモ吾人  
生存ノ基本ハ実ニ吾人ノ勞心勞力ニシテ富有  
ハ之ニ依テ所得シタル生存ノ要物ヲ節儉ニ始メ



テ致スヘキモノナシハ專ニ民人家居ノ交際ヲ  
治スルヲ以テ目的トスル民治ノ如キモ尙ホ且  
ツ此二者ヲ直接ニ如何トモスル能ハス况ニヤ  
其專門ニ非ラサル政治論ニ於テオヤ斯ク論ス  
レハ生存富周ノ二者ハ取テ之ヲ立治ノ目的中  
ニ置クモ終ニ無用ニ屬スルカ如シト吾人顧ミ  
テ生存ヲ得ルト富周ヲ有ツトハ立治ノ第一歸  
旨タル安固アルニ依ルヲ明カニシ亦生存富周  
等アルヲ以テ安固ノ始メテ必用ナル所以ヲ知  
ラハ立治施政ノ際、那ノ二者ヲ度外視スヘカラ

ナルハ深ク考察スルヲ用ナシテ明ナルヘシ  
安固トハ吾人ノ福祉安樂ヲ護リ吾人ノ福災苦  
痛ヲ防ク所以ノモノヲ云ヒ吾人ノ身体財産家  
権。政權。名譽等ヲ安固ナラシム是レナリ格スル  
ニ福災苦痛ニ二ツノ別アリ曰ク天然ノ災難曰ク  
人類ノ殘害。天然ノ災難ハ河水ノ溢漲。海潮ノ洋  
浸。火災。瘟疫。地震。電雷。飢饉等ヲ云ヒ具起ル性理  
ニ出テ漸々避クヘカラサルモノアリト吾人若  
シ人作ノ豫防ヲ欠クアラハ遇々以テ之ヲ増加  
スルニ足ルモノナシハ施政スルノ術ヲ講スル



ハ又濟生救民ノ一大要點ナリ人類ノ殘害トハ  
他人ノ我カ安寧ヲ殘害擾乱スルヲ云ヒ内生外  
来ノ別アリ外来ノ殘害トハ外敵ノ我ヲ殘害擾  
乱スルヲ云ヒ之ヲ防護スルハ実ニ政府ノ一大  
責任ナリ内生ノ殘害トハ内国人ノ我ヲ殘害擾  
乱スルヲ云ヒニツノ別アリ一ニ曰ク常人ノ我  
ヲ殘害スルモノニ曰ク官人ノ我ヲ殘害スル  
モノ常人ノ我ヲ殘害スルモノハ世称スルニ罪  
人犯者ノ名ヲ以テ之ニ刑治アリテ之ヲ懲シ  
之ヲ防禦スルモノナリ官人ノ我ヲ殘害スルモ

ノハ在官者ノ其治民權柄ヲ弄ヒ我カ権理ヲ妨  
害スルモノヲ云ヒ之ヲ防禦シテ我ヲ安固ナラシ  
ムルハ特リ夫ノ国憲ノ在ル有ルニ依リ余ノ本篇  
ヲ著ハス要斯一邊ヲ説クニ在リ平等ノ意義ヲ  
民衆等ノ上ニ在リテ説ケハ財産ノ平均交通ノ  
平等等ノミヲ云フト雖凡国憲上ニ在リテ之ヲ  
説ケハ賞罰与奪ノ公平モ亦其中ニ含蓄セシメ  
サルヲ得サルモノナリ抑モ財産平等ノ想像ハ其  
形美麗ニ似タルカ為メ世ノ公平ニ熱中スルモ  
時或ハ之ニ眩惑註誤セラシ無暗ニ之ヲ勸奨



セント歎スルモノアリト雖も平等ノ能ク平等  
タル所以ハ亦夫ノ安固ノ存スルニ依ルモノナ  
レハ之ヲ害セサル丈ニ非ラサレハ能ク平等ノ  
想像ヲ實際ニ奉用スハカラサルモノナリ是ヲ  
以テ若シ誤テ之ヲ無暗ニ勸メナハ人々安固ノ  
恃ヲ失フカ為メ富周ヲ課ルノ念忽々ニ消滅シ  
是ニキニ至リテハ生存ノ術ヲモ求ムルニ墮カ  
ラレメ平等ヲ課ル所ノ主物ヲシテ途ナカラシ  
ムルニ至ルモノナリ豈ニ換ミヲ加ヘサレハケ  
ンヤ

以上叙スル所ニ就キ輕々着了レハ四大事皆相  
分別ニ互ニ其趣ヲ異ニセルニ似タリト雖も何  
細ニ実況ヲ着承レハ四者ノ交通頗ル親密ニシ  
テ互ニ相連接シ一ヲ奉ケハ他ノ三者共ニ得ヘ  
キモノアルヲ知ルヘシ譬ヘハ安固ノ如キ若シ  
一タヒ之ヲ奉ケハ生存モ得ヘク富周モ得ヘク  
平等モ亦随テ得ヘキナリ然リト雖も時トシテ  
四者乃至二者ノ相伴ヒ難キ時ナキ能ハス譬ヘハ  
平等ノ安固ニ於ル如キ彼ヲ勸メテ此ヲ害スルコ  
トアリ吾人若シ此等ノ時ニ當ルアラハ其最モ必



用ナルモノヲ取り其次ナルモノヲ捨ルノ外又  
他アラサルナリ故ニ豫メ四者ノ輕重ヲ比較シ  
彼此ノ關係ヲ一定スルハ立法ノ途ニ於テ最モ  
切要ナルモノナリ依テ竊ニ之ヲ採スルニ生存  
安固ハ本ナリ富周平等ハ末ナリ蓋シ安固ニシ  
テ微セハ平等一ヨモ存セス生存ニシテ微セハ富周  
終ニ存スルナケレハナリ是ヲ以テ生存ト安固トハ  
立法ノ序ニ於テ最モ注意スヘキモノニシテ富周  
ト平等トハ其次ナルヲ知ルヘシ然リト雖民法制  
ヲ以テ直ニ生存ノ事ヲ催促スヘカラス唯安固

ノ一事ヲ擧ケ之ヲ以テ簡接ニ之ヲ勸ムルヲ得  
ルモノナレハ法制上安固ヲ謀ルモノヲ擇テ生  
存ヲ謀ルモノ、上ニ置クハ又當然理ナリ故ニ  
立法ノ最大要旨ハ夫ノ安固ニシテ國憲ノ如キ  
ハ特ニ被治者ノ安固ヲ謀ルモノナリ余故ニ立  
憲ノ大旨ヲ説テ主治者ノ暴政濫治ヲ防禦シ  
被治者ノ安堵ヲ謀ルモノナリト云フ也  
余ハ立憲ノ大旨ヲ説シカ為メ多少ノ時抄ヲ費  
シ反覆推論シタレハ最早讀者ハ余ノ所謂立  
憲ノ大旨ナルモノヲ十分ニ了解セラハナル



へし果シテ然ラハ余將チニ論説ノ歩ヲ進メ此  
大歸旨ヲ全フスルノ方途ニ説キ入ラントス  
大歸旨ヲ全フスルノ方途ヲ詳細ニ説ントナシ  
ハ其事柄ノ数多ナル此冊子ヲ百數十ノ多ヲ重  
ヌルニ非ラヤレハ能ク尽スコト能ハズ素ヨリ此  
小冊子ノ論説ヲ以テ満足スヘキモノニ非ラス  
ト云レ今試ニ其大要ヲ示サンニ實ニ一言ノ  
以テ之ヲ蔽フアリ曰ク能ク其人ヲ得テ官職ニ  
適當セシム是レナリ斯格言ハ古来ヨリ唱ヘシ  
太熟ノ語句ニシテ新發明ト云フニアラヤレハ

読者或ハ之ヲ疑ヒ他ニ新案ノ在ルヘキヲ求メ  
ラルモノアルヘシト云レ古今ノ經驗事理ノ當  
然ニ於テ夫ノ大歸旨ヲ全フスルノ方途ハ能ク  
其人ヲ得テ官職ニ適當セシムルノ外又他術ア  
ラサルナリ英ノ碩学「ベンタ」翁ハ夙ニ真利ヲ  
以テ本旨トシ政治ノ学ヲ講明シ政科ノ題目ニ  
就テハ数々新案ヲ出セシ人ニシテ其實際ニ行ハ  
シシモノ頗ル多シト云レ其立憲ノ大歸旨ヲ全  
フスルノ方途ヲ説クニ至リテハ即チ之ヲ全フ  
スルノ方畧夥多アリト云レ皆勉メテ官職ノ應



當ヲ増加スルノ一言ヲ出テスト云ヘリ翁ノ所  
謂ル勉メテ官職ノ應當ヲ増加スト云余カ所謂ル  
能ク其人ヲ得テ官職ニ適當セシムルノ意ニシ  
テ蓋シ之ヲ外ニシテハ競ヒ新業アリト云氏必  
ス無用的ノ浮案ナルヲ知ルハ然リト云氏唯  
夫ノ大熟ノ格言ヲ拳ルノモニシテ止マハ寧ロ  
太簡ニ過ルヲ以テ讀者或ハ云ハシ新格言ハ我  
シ既ニ熟知セリ特リ之ヲ用ユルノ術ニ乏シキ  
ヲ如何セント是レ可然ノ歎ニシテ余モ亦嘗テ  
之ヲ憂ヘタリト云氏頃ロ「マン」タル翁ハ万邦必

採國憲考案ナル者ヲ讀ミ官職應當ノ三原素ヲ  
説クモノヲ見ルニ及ニテ稍々彙明スル所アリ故  
ニ今其説ヲ取り之ヲ茲ニ述ント敢テ官職應當  
ノ三原素ハ一ニ曰ク務メテ官人ノ德義ヲ全フ  
セシムニ二ニ曰ク務メテ官人ノ聰明ヲ勸メシム  
三ニ曰ク務メテ官人ヲシテ活潑勤勉ナラシム  
ハ是ナリ德義トハ官人ノ実直ニシテ須臾モ社  
會一般ノ眞利益ヲ忘シス毎ニ之ヲ増加セン  
ト敢テ敢テ私利ヲ營ムコトナキヲ云ヒ勉メテ  
其德ヲ全フスルハ官職應當ノ三原素中最大要



ノモノニシテ苟モ斯並原素ニシテ具備ヒス少  
シニテモ其不足ヲ生シナハ他ノ二原素ヲ全フ  
シ之ヲシテ聰明電ナラシムル遇々以テ利私ノ  
悪心ヲ実行スルニ足ラシメ社會ノ幸福ヲ損害  
スルヤ又言フヘカラサルモノアリ余実ニ君主  
ノ姦雄ナルモノニ壓抑シテ民人ヲ治スルヲ以  
テ之ヲ證ス顧フニ夫ノ姦雄ノ君主ハ賦性聰明  
処事活潑ナルモ公ニ社會ヲ利濟スルノ良心昂  
テ徳義ナキカ為メ己レノ私便ヲ之レ謀リ社會ノ  
公利ヲ性攝ト為スモノナリ今眞利ヲ愛シ社會ノ

公益ヲ重ンスル心ヲ以テ之ヲ考フレハ豈ニ又  
之ヲ悲マサラシヤ聰明ハ徳義ノ次ニシテニツ  
ノ小別アリ曰ク学識曰ク果斷学識ハ古今ノ成  
敗事理ノ曲直ニ通シ能ク眞利ノ所在ヲ講明ス  
ルノ識量ヲ云ヒ果斷ハ事ニ臨ミ其利不ヲ斷決  
スルノ能力ヲ云フ蓋シ此二者ニシテ存スルコ  
トナクハ縦ニ徳義ノ良心ヲ腦中ニ寓スルアル  
モ其術ニ乏シキカ為メ遂ニ其志ヲ實際ニ施行  
スルコト能ハサルモノナリ愚勉ハ事ヲ處スル  
ニ励精活潑ナルヲ云ヒ饒ヒ他ノ原素ヲ具スル



モ斯原素ヲ欠クアラハ事ヲ處スル徃々時機ヲ  
誤リ能ク功用ヲ奏スル一ナカルヘシ故ニ斯三  
原素ハ共ニ存シテ相發明シ官人ヲシテ其職分  
ヲ全フセシムル為メ一モ欠クヘカテサルモノ  
ナルヲ知ルヘシ  
説ヒテ茲ニ至レハ讀者必ス如何セハ能ク官人  
ノ徳義ヲ全フセシムルニ足り能ク之ヲシテ聰  
明黽勉ナラシムルキヤト問フナルヘシ余既ニ  
其必至ノ尚業ナルヲ了知スレハ嘗テ先哲ノ所  
説ヲ擇ヒ既ニ吾カ説ヲ極メシモノアリ乞フ試

ニ之ヲ以テ貴問ニ答シ官人ノ徳義ヲ勸ムルニ  
八箇ノ要則アリ一ニ曰ク社會ノ輿論ニ原キ官  
人ヲ進退セシムルニ接スルニ被治者ヲシテ主  
治者ヲ撰ハシムルハ主治者ノ徳義ヲ全フセシ  
ムル第一要訣ナレハ成ルルニ之ヲ斯點ニ導ク  
ハ固安ノ為メ最モ切ナルモノナリ顧フニ立君  
ノ国出ニ於テハ斯要訣ヲ充ルニ用ユヘカラサ  
ルモノアリト峯氏宰相以下ヲ輿論ニ依テ進退  
スルハ歐洲各出具例少ナカラスニ曰ク其暴  
悪ヲ逞スルニ足ルヘキ権カヲ官人ニ与ヘス務



ナテ之ヲ減殺スヘシ  
三ニ曰ク善身ヲ施スニ足  
ルハギ権力ハ其自然ニ任セ少シク衰フルモ強  
テ之ヲ勸ムルヲ用井ハ四ニ曰ク官人ニ付托ニ  
治理セシムル公共ノ金穀ヲ勉メテ減殺スヘシ  
五ニ曰ク金穀ヲ付托スルノ時劑ヲシテ勉メテ  
短カカラシムヘシ六ニ曰ク金穀ヲ取扱フ官吏  
ノ教ヲシテ勉メテ少ナカラシムヘシ七ニ曰ク  
真成ニ餘分ノ役ヲ服セシモノニアラサレハ餘  
分ノ給与ヲ為スヘカラス八ニ曰ク各官ノ責任  
ヲ明示シ重ク之ヲ責ムヘシ今按スルニ各官ノ

責任ヲ重クスルハ其徳義ヲ維持スル為メ最モ  
必要ナルハ人事ノ実況ニ於テ明カニ徴スヘキ  
モノニシテ人々ノ熟知セルモノナレハ今更ニ  
之ヲ喋々スルヲ要セスト當氏之ヲ尽サシムル  
ノ術ハ賞ニ在ル手將夕罰ニ在ル手ノ一尚ニ至  
リテハ或ハ賞ヲ以テ誘導スルヲ温良ナリトシ  
或ハ罰ヲ以テ強逼スルヲ適宜ナリトシ世未タ  
一定ノ說アラサルナリ依テ竊ニ之ヲ考ルニ罰  
ニ非ラサレハ能ク督責ノ功ヲ全フスルコト能  
ハサルモノ、如シ蓋シ賞ヲ以テスレハ官人ヲ



シテ之ヲ望ムノ心ヲ生セシメ自カラ獎勵ノ効  
ナキニ非ラスト當ニ罰ヲ恐ルノ心ニ比スレハ  
孰シカ切ナルハ智者ヲ待スミテ知ルヘケレハ  
ナリ之ニ加フルニ賞ハ大抵罰ノ結果(其ノ詳ナ  
ルハ第七章賞罰ノ篇ニ於テ論述スルモノアリ  
讀者乞フ孰テ見ヨ)ニシテ不断之ヲ用ユヘカラ  
サルモノナレハ終ニ之ヲ以テ責任ヲ尽サシム  
ルノ良策ト為スヘカラサルナリ是ニ於テ余ハ  
更ニ一條ヲ要則ニ加ヘ罰責ヲ以テ官人ノ自任  
ヲ強逼スヘシト云フ罰責ニ四類アリ一ニ曰ク

免黜シテ更ニ加刑スニニ曰ク免黜ス三ニ曰ク  
過失ヲ贖サシム四ニ曰ク呵責ス  
官人ノ聰明黽勉ヲ勸ムルニ四ツノ要則アリ一  
ニ曰ク各官ニ執テ一々事務ノ試法章程ヲ定置  
シ責任ノ所在ト権力ノ限界トヲ明示スヘシニ  
ニ曰ク試法章程ニ明示セル責任ヲ充分ニ尽シ  
テ之ニ明示セル権限ヲ確守スルノ実アラシ  
ムヘシ三ニ曰ク人品ヲ檢閲シテ之ニ應シテ之ヲ  
用ユヘシ四ニ曰ク勉メテ官人ノ給与ヲ減殺ス  
ルヲ旨トスヘシ以上四則其一則二則三則ハ別



ニ標識ヲ要セスト云凡其四則ニ至リテハ之カ  
原ク所以ノ事理ヲ畧説スルヲ要須トス今速了  
ノ見ヲ以テ之ヲ考フレハ勉メテ給与ヲ減殺ス  
ルハ官人ヲシテ不満ノ心ヲ抱カシメ遇々其職  
ヲ曠フセシムヘキノ勢アルヲ以テ論者或ハ之  
ヲ非難スルモノアラレ然リト云凡余ヲ以テ之  
ヲ見ルニ賢官明吏ノ能ク其職ヲ尽シ機敏事ヲ  
勉スルモノハ大抵己レノ力能ク實際ニ施行ス  
ルヲ得ルノ快樂アルニ依リ其給俸ノ厚キニ依  
ラサルモノ多シ而シテ其厚ニ誘導セラレ始メ

テ勉励ノ心ヲ起スモノハ其薄ニ依テ又必ス其  
志ヲ衰ヘシメ所謂ル給俸ノ厚薄ニ依テ其徳ヲ  
二三ニスルモノナリ此輩ヲシテ馬ニソ能ク社  
會ノ幸福安寧ヲ至ルニ至治者ノ位ニ居ラシムハ  
ケンヤ決シテ吾人ノ安寧ヲ托スヘカラサルナ  
リ加之漫リニ其給俸ヲ厚クセハ之ニ依テ種々  
ノ弊害ヲ生スルコト多シ余今實際ニ於テ親シ  
ク経験セシモノ、一二ヲ挙テ之ヲ證センニ其  
給俸ヲ厚クセハ逸樂ニ流シ甚シキハ流連官ニ  
負クヘシ又其餘贏アルヲ以テ時々之ヲ用ナラ

贏



愚民ヲ瞞着シ私恩ヲ賣テ社會ノ公利ヲ害スル  
コトアルヘシ又是シ一箇ノ官人ヲ富ス為ニ數  
箇ノ人民ヲ貧カラシムルモノナリ是レ則チ官  
人ノ給俸ヲ勉メテ減殺スヘキ所以ノ原理ニシ  
テ之ヲ減殺スト雖モ尚ホ且ツ國家大政ノ衝ニ  
當リ其煩擾ヲ顧ス官人ト為ラントスルモノア  
ラハ斯レソ社會ヲ利益スルヲ以テ自任シタハ  
真成ノ主治者ト云ツヘシ西哲「ベント」曰ク官  
職ヲ應當セシムルハ費用ヲ減殺スルヲ要ナリ  
トスト夫レ之ヲ謂フ

以上通シテ十三則ハ國憲ノ大綱ト謂フヘキモ  
ノニシテ苟モ之ヲ擴充シテ其宜ヲ得ハ必ス官  
人ヲシテ其德義ヲ全フシ其聰明黽勉ヲ增加セ  
シムルニ足ラン乎是レ於テ余ハ論述ノ方向ヲ  
一轉シ國憲ニ編入スヘキ緊要ノ事項ヲ簡約ニ  
説ホシ以テ此ノ章ヲ了ルヘシ  
國憲ニ編入スヘキ緊要ノ事項ニ十二箇アリ一ニ  
曰ク國郡ノ區畫ニ曰ク諸官ノ職分權理三ニ  
曰ク諸官任免ノ制四ニ曰ク民人身命ノ自主五  
ニ曰ク財産ノ自由六ニ曰ク名譽ノ權七ニ曰ク



信仰ノ自由ハ二曰ク臨時持戒ノ自由九二曰ク  
結社ノ自由十二曰ク言論ノ自由十一二曰ク新  
合新分ノ州郡ニ許允スヘキ特權十二二曰ク新  
属ノ州郡ニ許允スヘキ特權是レナリ

### 第三章

前章本章次章トノ關係 亞細亞

ニ行ハレシ政府ノ想像ハ卑シキ故主論ノ  
根拠ヲ泰西ノ說ニ取ル事 政府起立ノ諸說  
政体ノ三種 合衆政治ノ實際ニ行ハシ  
難キ事 雅典ニ合衆政治ノ行ハレシ所以  
米洲聯邦ハ純粹ノ合衆政治ニアラサル  
事 寡人政治ハ一得モナキ事ナリ昔時印  
度ニ貴族合議ノ政行ハレシ畧說 獨裁政  
治ノ得失ナリ原根約束說ノ非 三種ノ政  
体ヲ合儀スルハ實ニ於テ行ハレサル事ナリ



リ英國政体ノ実質 代議政治ノ意義ニ  
最良ノ政体ナル事有り 其全効ヲ奏セシム  
ル要訣二則 本邦政治ノ沿革実況畧説  
代議政治ノ本邦ニ実行スルヲ得ル所以  
君民同治ノ政体ヲ採用セハ 皇統ノ綿々ヲ  
萬世ニ保持シ易キ事 議院設置ノ駁論ニ  
ニ辨

前章ニ次キ國憲ノ一大要目ナル 政權ノ義ニ説  
キ入ント試ミシト 吾氏政權ノ所在ハ 政体ノ如  
何ニ依テ變動スルヲ以テ先ツ此章ヲ設ケ專ニ

政体ノ各種ヲ吟味シ孰シカ能ク政府ノ大端ニ  
ヲ得ルニ足ルヤヲ 論定スヘシ  
我亞細亞ノ先哲中政府ノ事ヲ説クモノアリト  
雖モ其説ク所口頗ル卑シク 徃々代紳政治家長  
專制ヲ以テ政ノ常トシ 稍々進歩セムモノモ君  
主独裁ノ治ヲ説クニ 過キサレハ 余ハ此第三章  
ノ前段ヲ説クニ 當リ 勢泰西諸名家ノ説ヲ列テ  
立論ノ根拠ト為サルヲ得ス 是著者カ心中ニ甚  
耻ル所ニシテ 其苦シキ事嚮ニ 本邦國憲發出ノ  
義ヲ説テ 泰西人ニ 代リタム時ノ情ニ 似サルト



リ然リト多ク是斯耻ニアルハ吾人カ文明ノ実域  
ニ進歩スル證ナレハ余ハ之ヲ以テ自カラ慰セ  
サルヲ得ス

依テ顧テ泰西諸名家ノ政府ノ起立セシ所以ヲ  
説ク者ヲ見ルニ或ハ曰ク公益ヲ謀ル為ナリ或  
ハ曰ク人類生存ノ難ヲ避クル為ナリ或ハ曰ク  
本原ノ約束ニ出ルナリト又其政体ノ變遷ヲ説  
クモノヲ見ルニ或ハ人智ノ進歩ニ依ルト云ヒ  
或ハ自然ノ勢力ニ依ルト云ヒ其所説千差万別  
頗ル一ナラス孰シカ是孰シカ派之ヲ擇フニ難

キモノアリト吾民之ヲ要スルニ本原ノ約束ヲ  
説ク者ヲ除クノ外ハ各々一隅乃至三隅ニ其理  
ヲ存シホク一抹ニ塗却シ去ルヘカラサルモノ  
アリ然リト多ク余ヲ以テ之ヲ見ルニ既ニ政  
府ノ形ヲ存シ其各ヲ下スヘキ者アルニ至リテ  
ハ饒ヒ其起立ハ謀益ニ依ルモ避難ニ依ルモ其  
變遷ハ人智ニ依ルモ自然ニ依ルモ之カ目的ト  
シテ課ルヘキモノハ社會一般ノ真利即チ最多  
衆ノ最大福祉ニアラケルヲ得ス故ニ余ハ私ニ  
以為ク長ク這般難決ノ議論ヲ為シ空シク時ヲ



費ヤンヨリ寧口之ヲ為サ、ルノ勝レルニ若ス  
ト是ヲ以テ今敢テ深ク其起立ノ根源ヲ其變  
遷ノ如何ヲ極メス直入各種ノ政体ヲ吟味シ孰  
レカ能ク夫ノ要點ヲ得ルニ易キヤヲ論定スヘ  
シ  
泰西政事家ノ毎ニ説ク所ニ據テ之ヲ云ヘハ政  
治ニ三箇ノ別類アリ一ニ曰ク有衆自カラ之ヲ  
為スニニ曰ク教人ノ手ニ委シテ之ヲ行ハシム  
三ニ曰ク一人ノ手ニ歸シテ其為ス所ニ任ス是  
世人ノ所謂ハ合衆寡人獨裁ノ三治ナルモノニ

シテ字内ノ政治萬態ノ異アリト留氏皆斯範圍  
ヲ出テサルモノナリ  
按スルニ合衆ノ政治ヲ實際ニ奉行スルヲ得ハ  
其義實ニ筆言スヘカラサルモノアルヘシト能  
ク唯之ヲ実行セハ或ハ政治ノ効ヲ奏スルコト  
ナク是レキハ終ニ有衆ヲ凶滅スルニ足ルヘキ  
兆候アルヲ如何セン如是説キ出シ来レハ合衆  
政治ノ義ヲ妄信スル族ハ必ス眼ヲ瞶シテ其故  
ヲ詰問スルナルヘシ是余カ好シテ答辨ヲ為ラ  
欲スルモノニシテ敢テ遲滯セス之カ答詞ヲ作



ルヘシ抑政府ノ事務ハ衆民ノ咸ク起テ手々ニ  
従事スヘキモノニアラス必ヤ數十ノ人負ヲ用  
井之ニ従事セシメサルヲ得サルモノナリ而シ  
テ斯數十ノ人負ヲ用キトスルマ有衆タルモ  
ノ其適當ノ人ヲ撰擇シ之カ規矩ヲ制シ又之ヲ  
誤用セハ之カ懲罰ヲ行ハサルヲ得ス是レ即チ  
政治ノ三大權ナルモノニシテ苟モ之ヲ実行セ  
ントナレハ有衆タルモノ必相會シテ同議セサ  
ルヲ得サルモノナリ相會シテ同議スルハ有衆  
ノ最モ難スル所ニシテ若シ強テ之ヲ爲サント

欲レハ衆民咸ク職業ニ従事スルヲ得サルカ爲  
メ国家ノ存亡未タ知ルヘカラサレハナリ蓋シ  
有衆ノ存スルハ財産ノ存スルニ依リ財産ノ存  
スルハ唯夫ノ職業ニ従事スルニ依レハナリ加  
之數万ノ衆民ヲ一時ニ集同セハ衆論多議殆ン  
ト決案ノ期ナカルヘシ是レ合衆政治ノ實際ニ  
行ハレサル所以ニシテ若シ強テ之ヲ行ハント  
ナレハ少ニシテハ政治ノ功ヲ奏セス大ニシテ  
ハ有衆ヲ亡滅スヘシ惟フニ世ノ合衆ノ政治ヲ  
妄信シ之ヲ主唱スルモノハ必ス有衆ノ存在ヲ



憶ヒ政治ノ有効ヲ謀ナルヘシ然ルニ其結果此  
ノ如ク夫レ不吉ナリ是実ニ思フヘキノ點ニア  
ラスヤ

或人之ヲ駁シテ曰ク昔時希臘ノ一部ナル雅典  
ニ於テ人民ヲ總會シテ政務ヲ議シ裁判等ヲ爲  
シタルコトアリ是実ニ合衆政治ノ実行セラル  
ヘキ證左ナリト余モ亦嘗テ希臘ノ旧史ヲ讀ミ  
之ヲ記スルアレハ敢テ之無シト拒絶セスト  
余氏之ヲ以テ他ノ凡例トナシ合衆政治ノ実行  
ヲ證シ難キモノアリ何ソヤ曰ク雅典人口ノ多

寡ハ史書記スルモノナシト吾氏其數ノ過多ナ  
ラサリシハ雅地加列ノ狹矮ナルヲ以テ証スヘ  
キモノニシテ嘗テ斯オニ於テ純粹ナル合衆政  
治ノ行ハレシ迹アルハ職トシテ此人口ノ少數  
ナルニ依ルコトアルヲ知ルヘケレハナリ惟ニ  
今ノ時ハ昔時希臘ノ時ニ非ラス各土窺隙ノ密  
ナル決シテ雅地加ノ如キ小邦ヲ以テ獨立ヲ謀  
ルヘカラサルナリ又幸ニ各土交通ノ便ナルヲ  
リテ能ク小ヲ合セラ大ト爲テ得ハ彼ノ如キ小  
邦ヲ以テ一國ヲ建ルヲ要セサルナリ是雅典ノ



凡例ヲ引テ之ヲ今日ニ證スヘカラサル所以ニ  
シテ若シ之ヲ以テ之ヲ今日ニ行ハ、大衆會同  
ノ不便ナル遇々以テ其国土ノ衰滅ヲ致スヘキ  
ナリ豈ニ恐レサルヘケシヤ

本邦人ノ中西洋ノ事情ニ明ナラサルモノハ尙  
々米洲聯邦ノ政治ヲ以テ合衆ノ純粹ナルモノ  
トナセルカ如シ是は大ナル誤ニシテ爲ニ少ク辨  
セサルヲ得サルモノナリ蓋シ米洲聯邦ニ於テ  
ハ大統領元老官代議員等以下皆テ民人ノ撰舉  
ニ係ルト云凡民人タルモノ直ニ起テ議政施政

裁判ノ三種ヲ実行スルモノニアラス的切ニ之  
ヲ云ハハ被治者タルモノ果々ノ主治者ヲ撰ヒ  
爲政ノ事ヲ委任スルモノニシテ所謂代議政治  
ナリ抑モ代議政治ノ合衆政治ニ殊ナル所以ハ  
其文字ノ意義ノミニテモ了知スヘキモノニシ  
テ其性質ノ如キハ余下段ニ於テ説クモノアリ  
唯邦人ノ中未タ之ヲ知ラサルモノアリ故ニ米  
洲聯邦ヲ妄信シテ合衆ノ政治ヲ採ルモノトナ  
シ合衆ノ政治ヲ実行スヘキモノト爲スニ至ル  
是實ニ謬誤ノ甚シキモノナリ



寡人政治ハ一ニ右族共治或ハ貴族合議ト称シ  
政治ノ全權ヲ教人ノ手ニ攬包セシメ他ハ之ニ  
干与セサルモノヲ云フ「アラクストン」氏嘗テ其  
溥所ヲ称シテ曰ク能ク才智ニ富ムト今余ヲ以  
テ之ヲ觀ルニ氏ノ斯ク云ヒシハ何ノ見ル所ヲ  
リテ然ルヤヲ詳ニセス抑才力智識ナルモノハ  
人類秉事ノ際心腦ヲ勞役スルニ依リテ生スル  
モノニシテ所謂ル自然ノ物ニアラサルナリ故  
ニ心腦ヲ勞役スルコトナクハ才智ノ富ムヘキ  
所以ナキナリ今唯ルニ夫ノ政權ヲ攬包シ之ヲ

世襲スルノ貴族ハ能ク心腦ヲ勞役スルコトナ  
ル歟余今世間ノ既往ニ經驗シタルモノヲ以テ  
之ヲ推スニ向來モ亦其稀ナルヲ知ル蓋シ貴族  
ハ居所ニ豊饒ナルヲ以テ事ヲ更フルモノ稀ナ  
レハナリ果シテ然ラハ貴族合議ノ才智ニ富ム  
ト云フハは無縁ノ浮説ニシテ却テ之ヲ為政ノ  
才智ニ乏キモノト断言セサルヲ得ス是貴族合  
議ノ以テ政權ヲ委スヘカラサル所以ノ一端ニ  
シテ尚ホ別ニ之ヨリ甚シキモノアリ曰ク何ソ  
ヤ曰ク之ニ委スルニ政ヲ以テセハ自由黨類ノ



私利ノミヲ營ミ以テ社會ヲ妨碍シ政府設置ノ  
旨ヲ損害スヘシ抑モ人類ノ言行ハ其思慮ニ由  
テ發シ思慮ハ其情欲ニ因テ動ク者ニシテ一旦  
情ノ発動スルヤ心思必ス先自己ノ利益ニ及  
者ハ人類ノ本性ナリ而シテ斯ノ情欲ナルモノ  
ハ天地ニ亘リ古今ヲ極メテ遂ニ消滅スヘカラ  
サルモノニシテ政府ノ設ケアル實ニ斯情欲ヲ  
制御シ人民一般ノ利益ヲ謀ルモノナリ然ルヲ  
今政治ノ大權ヲ奪テ之ヲ委シ世々之ヲ攬  
包襲續セシメ他ヨリ之ヲ干預セサル時ハ貴族

タルモノ豈ニ其情欲ヲ抑制シテ自カラ止マン  
ヤ必ス之ヲ逞シテ社會ノ利益ヲ侵掠シ以テ自  
カラ利スヘキナリ果シテ然リ故ニ貴族合議ハ  
政權ヲ委シテ社會ノ利益ヲ謀ルヘキモノニ  
アテサルナリ噫々独裁ノ政治ハ其失アリト云  
モ尚ホ仁君ノ出ルアルヲ等候スヘクシテ稍々  
取ルヘキモノアリト云モ貴族合議ノ政治ニ至  
リテハ斯望スヲ能ク存スルコトナシ蓋シ貴族  
ノ中一二仁良ノ心ヲ抱クモノアルハシト云モ  
其全局ニ就テ之ヲ望ムヘカラサシハナリ先哲



嘗テ貴族合議ノ政治ヲ評シテ最悪ナルモノナ  
リト云フハ決シテ誣語ニアラサルナリ  
余ハ今因ニ昔時印度ノ地方ニ貴族合議ノ行ハ  
シシ事ヲ記シ読者ノ一察ヲ擣スヘシ世ノ学者  
ハ大抵信シテ亞細亞地方ニ五君独裁ノ外他政  
ノ行ハレシコトナシト為モノ、如ク余モ亦嘗  
テ之ヲ然リト為セリ然ルニ頃口真宗法要典據  
テハ書ヲ看ルニ維摩佛經ノ註ヲ引テ毗那離國  
ニ君主アルコトナシ唯五百ノ長者アリテ共  
ニ國事ヲ理ス云々トアリ是正シク貴族合議

ノ政体ニシテ之ヲ以テ之ヲ推セハ嘗テ印度ニ  
代議政治等ノ存セシコトアルモ未タ知ルヘカ  
ラサルナリ唯惜カナ余ヤ淺陋未タ之ヲ記スル  
ノ書ヲ見ス故ニ今得テ明言スハキナシ噫  
政務決行ノ能アリトハアラクストニカ独裁政  
治ノ得所ヲ稱シタル語句ニシテ余モ亦之ヲ許  
セリ然リト云フ能カナルモノハ君主ノ良否  
ニ依テ具關係ヲ殊ニスルモノニシテ君主ニシ  
テ若善良仁愛ナラシメハ其決行ノ能力ヲ以テ  
大ニ社會ヲ利スルコトアルヘシト云フ若シ之



ニシテ完惡ナラシメハ其能力ハ過々以テ社會ノ大不利ヲ致スニ足ルモノナリ故ニ斯得所ハ寧口仁德ノ君主ニ付スヘキモノニシテ之ヲ以テ独裁ノ政治ヲ概稱シ難キモノナリ加之若シ暴君汚主ヲ得ハ独裁政治ノ失大抵貴族合議ト均シケレハ常ニ之ヲ以テ社會ノ安寧ヲ付托スルノ要具ト為スヘカラサルヤ必セリ

然ルニ歐洲ニ在テ嘗テ好學ノ學者「ホフベ」ハモノアリテ類リニ君臣ノ約束ヲ唱ヘルソ臣隷タルモノハ咸ク其自由ヲ辭シテ君主ノ所

為ニ任スヘシ是即チ天理ナリト云ヒタシト畢竟は無證ノ浮語ニシテハ自カラ陋説ノ識ヲ拓クニ足リ大ニシテハ世ノ暴君ヲシテ口ヲ藉テ其虐政ヲ縱ニセシムルニ足ルモノナシハ其説須臾ニシテ説破セラレ殊ニ「ペンタム」翁ノ如キハ力ヲ極メテ之ヲ駁論シ遂ニ今日ニ至リテハ其痕ヲタニ止ムルコトナキニ至ル惟ニ邦人ノ智最早斯等ノ卑説ヲ以テ瞞着セラレサルヘシト云ヒ其想像ハ亞細亞ノ旧説ト稍々相類似スルヲ以テ邦人数万ノ多キ其中誤テ之



ヲ信スルモノナキヲ保シ難シ故ニ今故ラニ之  
ヲ表出シテ聊カ之ヲ駁論スベシト也翁嘗テ之  
ヲ駁シテ曰ク又是假想ナリ正理ニアラス又曰  
ク假想ヨリ生スル所ノ者ハ未タ一善タモ見  
スト翁氏之ニ依テ專恣ノ業ヲ為シトセハ何ノ  
惡事カナラサラント信ナル哉言ヤ笑

以上叙スル所ノモノニ就テ之ヲ考フレハ三種  
ノ政体皆具失點アレハ單ニ之ヲ用キテ以テ社  
會ノ安寧ヲ謀ルヘカラサルハ必セリト翁氏三  
体ノ秀ヲ合候シテ之ヲ用キハ其利害如何ソヤ

斯尚案ハ政体論中ノ最モ必用ナル者ニシテ学  
者多ク之ヲ利アリト為ス者ナレハ余ハ勿々過  
キ去ラス方ニ之ヲ吟味セルト欲ス

余依テ先ツ三体合候ノ意味ヲ平易ニ解釋スル  
ニ即曰ク一政府ノ政ヲ三分シ君主貴族平民ヲ  
シテ各其一分ヲ主ラシメ互ニ共同シテ之ヲ行  
フナリト是ニ於テ余ハ夷ニ考察ノ歩ヲ進メ人  
情ノ常態ヲ推シテ夫ノ三者ハ政務上ニ在テ何  
等ノ事ヲ為スヤヲ顧ルニ乃君主ハ常ニ其富有  
ヲノニ注意シ貴族モ平民モ共ニ己カ利候安樂



ヲ之レ嵩ノントスルモノナルヲ知ル是三體合  
保ノ終ニ実行スヘカラサルノ本源ニシテ若シ  
三者ヲシテ互ニ孤立シテ相結フコトナクハ幸  
ニ之ヲ以テ一時ノ存在ヲ保ツヲ得ヘシト  
人類ノ情欲ヲ逞スルノ念ナルモノハ世間遂ニ  
其極度アルヲ見サルモノナレハ此ノ如クニシ  
テ鼎立ノ形ヲ保テタル君主貴族平民モ其情欲  
ニ誘導セラレ遂ニ二者合シテ一ヲ滅シ其利ヲ  
分ツコトアルヘシ是人世ノ常態ニシテ吾人カ  
平生ノ交際上ニ於テ數々見聞スル所ナレハ政

治上ニ於テ具必有ヲ保スルモ太々過當ナルモ  
ノニ非ラサルナリ且ツ夫レ己レノ利ヲ謀テ人  
ノ害ヲ顧ミサルハ人情ノ常ナレハ三者利ヲ競  
フノ際相争鬪シテ社會ノ安寧ヲ攪乱スルモ未  
タ知ルヘカラサルナリ勢比ノ如シ故ニ三體ノ  
合保ハ遂ニ之ヲ實際ニ謀ルヘカラサルナリ曰  
ク然ラハ若シ二者ヲ合保セハ能ク成就スヘキ  
ヤ曰ク吾ナ世間若シ二者ノ権力ヲ平準スルヲ  
得ハ互ニ相制御シテ或ハ併立ヲ保ツヲ得ハ己  
ト強ク天下之ヲ全フスルノ術ニ乏シク二者権



カノ平均常ニ期スヘカラサルノミナラス遇々  
偶然ノ事ニ依テ之ヲ平均スルヲ得ルモ其猜疑  
相忌ノ餘リ往々争鬪ヲ致シテ遂ニ之ヲ失スル  
コトアレハナリ吁々三者ノ合侯既ニ難シ而シ  
テ二者ノ合侯モ亦難キ時ハ三体ノ一ヲ取テ之  
ヲ單用スルノ外世間又手段ナキカ如シ然リト  
モ氏三種ノ政体ハ彼ノ如ク夫レ失點アリ吾人  
將タ何ノ政体ヲ採テ之ヲ用ユヘキカ宜シク考  
察ヲ爲スハキナリ

人アリ英國現行ノ政体ヲ引キ余ノ前言ヲ駁シ

テ曰ク是レ三体合侯ノ実行セラハハキ的例ナ  
リ惟ニ子ノ所説ハ想像ナリ英國ノ政体ハ実事  
ナリ実事ト想像ト孰レカ最モ確當ナルヤ今英  
國ノ久シク平和シテ内治ノ舉ルヲ以テ之ヲ見  
ハニ併ノ合侯ハ大ニ社會ニ利アルヘシト余モ  
亦嘗テアラクストニ以下諸大家ノ英政ヲ稱シ  
テ三併ノ秀ヲ集ムルモノナリト爲スヲ仰キシ  
コトアレハ遠般ノ駁論ニ遇テ敢テ輕々ニ看過  
シ去ルヲ歎セス必スヤ英政ノ實質ヲ吟味シテ  
而シテ后々其是非曲直ヲ判決スヘシ依テ新ニ



英國ノ歴史并ニ政体沿革史等ヲ繙キ仔細ニ之  
ヲ吟味スルニ英國ノ平和ヲ今日ニ致シ民人ノ  
自由生存ヲ全フスルヲ得ル者ハ職トシテ王ウ  
サリヤ也三世ノ後教々政治大沿革ヲ行ヒシニ  
依ルカ如シ余ハ今其改正ノ一二ヲ云ハシニ權  
理之義王室相續之訟司法官獨立ノ保領刊行ノ  
自由天主教信者ノ放釋及ヒ議院改革ノ二議ノ  
如キハ其最モ著キモノナリ而シテ此ノ教政ニ  
孰ヲ其政畧ノ方向ハ果シテ何等ノ邊ニ在ルヤ  
ヲ吟味スルニ權理ノ議ナリ天主教信者ノ放釋

ナリ議院改正ノ二議ナリ皆是代議政治ノ精腦ヲ  
具スルモノナルヲ明知スヘシ夫然リ故ニ今日  
英政ノ實質ヲ的言スルハ三體ノ合儀ニアラス  
シテ實ニ代議ノ政ナリ英人能ク代議ノ政体ヲ  
用ユ故ニ英國ノ政治今日ニ整頓シテ民人其幸  
福ヲ全フスルヲ得ル(余未タ三體ノ合儀ニ依テ  
之ヲ致スヲ知ラサルナリ讀者若シ前言ニ疑フ  
者アラハ試ニ英史ヲ取り王ウサリヤ也三世即  
位前後ノ有様ヲ比較シテ仔細ニ看ヨ必ス思半  
ヲ過ルモノアラシク英國現行ノ政治モ既ニ三



体合候ノ実行ヲ證スルニ足ラサレハ三体合候  
ノ治又決シテ冀望スヘキモノニアラサレリ  
或人ノ曰ク以上叙スル所ニ依テ之ヲ看來シハ  
三體ノ單用モ其混用モ皆実行スヘカラサルモ  
ノナレハ天下遂ニ政體ノ善良ナルモノヲ得ハ  
カラサルカ如シ若シ夫シ然ラハ吾人ノ幸福ヲ  
得ルハ唯仁君ノ出ルヲ待ツノ外遂ニ又手段ナ  
キ手余對テ曰ク決シテ否ス世間人智ノ進歩セ  
ル有形ノ物ニハ種々ノ查出アリテ日ニ新ニ無  
形ノ物ニハ數多ノ改正アリテ月ニ進メリ故ニ

政體ノ如キモ亦其間ニ在テ自カラ新案ヲ出シ  
今日吾人ノ了知ニ得ル所ノモノヲ以テ之ヲ云  
ヘハ代議ノ政治ナルモノアリ能ク社會一般ノ  
利益ヲ謀ルニ足り能ク政府ヲ置クノ旨ヲ得ル  
カ如シ代議政トハ凡人ノ代人ヲ差出シテ政ヲ  
公議セシメ諸ノ訟ヲ立テ施政ノ方向ヲ定メ其  
派ヲ抑制セシムルヲ云ヒ具能ク政府設置ノ目  
的ニ達スルヲ得ルモノハ英ノ議院米ノ兩議院  
ヲ以テ充分ノ證左ト為スヘキモノ、如シ然リ  
而シテ代議ノ政治ヲシテ其全功ヲ奏セシムル



ニ二箇ノ要訣アリ苟モ之ヲ欠カハ其政モ亦社  
會ヲ利セスシテ却テ之ヲ害スヘシ要訣一ニ曰  
ク代議員ヲシテ其職務ヲ尽ス為メ充分ノ權力  
ヲ有セシムヘシニニ曰ク代議員ヲシテ毎ニ有  
衆ト其利害禍福ヲ共ニセシムヘシ抑モ代議員  
タルモノニシテ若シ施政官ニ對シ充分ノ抵抗  
力ヲ有スルコトナクシハ每ニ其抑スル所ト為  
リ其職分ヲ尽スコト能ハサルハ古今歐洲各土  
ニ其例多ク理ノ尤モ見易キモノナレハ苟モ代  
議ノ政体ヲ以テ政治ノ安穩ヲ謀ラント欲セハ

必ス之ニ付与スルニ至全ノ權力ヲ以テ之ヲ  
シテ遺恨ナカラシメサルヲ得ス是シ第一要訣  
ノ必用ナル所以ニシテ蓋シ至重ノ事ナリ然リ  
トモ代議モ亦人ナリ故ニ一旦其至全ノ權力  
ヲ得曾テ他人ノ掣肘ヲ顧慮スルコトナキニ至  
レハ焉ンソ知ラン彼其本性ヲ顯ハシ夫ノ至全  
ノ權力ヲ弄ヒ以テ自己身上ノ私利ヲ營ミ以テ  
社會ノ公利ヲ度外視センコトヲ是シ人情必有  
ノ事ニシテ代議員ヲ要スル所以ノ旨趣實ニ斯  
弊ヲ防クニ在レハ第一ノ要訣モ亦決シテ輕事



ニアラサレハナリ余嘗テ第二章ニ於テ官人ノ徳  
義ヲ勸ムルノ要訣九則ヲ説クモノアリ惟ニ其  
首則未則ノ如キハ此第二章ノ要訣ヲ実行セシム  
ルニ必要ナルモノナラズ。此ハ氏嘗テ云ヘ  
ルアリ曰ク代議員ヲシテ有衆ト其利害福福ヲ  
共ニセシメント欲セハ其宜ヲ計テ在職ノ年月  
ヲ盡限スルニ若スト又々以テ第二章ノ要訣ヲ実  
行スルノ一術ト為スヘシ

余ハ前段ニ踵キ議院ノ事及ヒ代議員選舉ノ事  
等ヲ説クト欲シタリト云ヒ其事タルヤ多端ニ

シテ此章モ既ニ數十紙ヲ疊テ尚ホ数事ノ辨論  
スヘキモノヲ餘スアレハ別ニ議院等ノ為メ其  
本章ヲ設ケ政体ノ概論ハ茲ニ閣筆ニ是ヨリ論  
述ノ方向ヲ一變シテ本邦ノ事ニ説キ入ルヘシ  
今余ハ本邦政治ノ沿革ヲ探リ其皮相ニ依ラス  
シテ其実況ヲ畧記セント欲シ国史ヲ閲キ一  
之ヲ吟味スルニ中葉以還相家武門專横ノ後本  
邦政治ノ実況頗ル言フヘカラサルアレハ之ヲ  
詳説セント欲シテ中心自カラ之ニ忍ヒサルモ  
ノアリ然リト云ヒ顧テ明治維新ノ鴻業ヲ成ヤ



今日ノ勢ヲ致セシ一因ハ斯不可言ノ有祿アリ  
シニアルヲ知シハ之ヲ忍ンテ之ヲ畧記シ舊時  
ノ感ヲ今日ニ起サシメ以テ吾人進取ノ氣ヲ鼓  
舞スルハ國土ニ對シテ大ナル不敬ニ非ラサル  
ヲ信ス故ニ之ヲ畧叙スル如左今惟ニ本邦政治  
ノ變遷ニ四大段落アリ而シテ其間小分段アル  
コト頗ル多シ蓋シ神武帝而後五十七世ヲ清和  
帝ト曰ヒ此間凡ソ千五百七十餘年之ヲ第一段  
落トナシ其間我日本人民ハ王家ノ親政ヲ以テ  
支配セラレ時或ハ休戚治亂ナキ能ハスト當凡

幸ニ崇神仁德二帝ノ仁政及ヒ推古天智天武文  
武教帝ノ良治アルニ遇フヲ以テ其文明ノ度級  
ニ依テ之ヲ論スレハ民人タルモノ其歡樂ヲ全  
フスルヲ得シト云フヘシ清和ヨリ安徳ニ至リ  
凡ソ二十五帝年ヲ經ルコト凡ソ三百有餘歳之ヲ  
第二段落トス其間日本ノ人民ハ大抵相家ノ意  
想ヲ以テ支配セラレ果々ノ地方ノ如キハ稍々  
封建ノ兆候ヲ顯ハセリ後鳥羽帝以降明治ノ初  
年ニ至ル迄ヲ第三大段落ト爲シ之ヲ封建ノ世  
ト云ヒ歳ヲ經ルコト凡ソ六百有餘年其間人民皆



四方ノ大名ニ依テ分治セラルル是ヲ以テ試ニ清  
和帝以降中央政府ノ有様ヲ實記スレハ王家君  
臨ノ名アリテ其實ナク或ハ藤氏ノ專制トナリ  
或ハ平氏ノ專治トナリ遂ニ頼朝ノ獨裁北條氏  
ノ專治尊氏ノ暴政管領家宰ノ支配信長秀吉家  
康等ノ禮制トナリ更ニ一變シテ祐筆ノ治トナ  
ル(祐筆ハ旧幕府ノ役名)等々態万状未タ咸ク詳  
明スヘカラサルハナリ加之大名ノ治所ハ各々隨  
意ニ具恣度ヲ設ケ寛アリ嚴アリ酷アリ苛アリ  
頗ル一様ナラサルノミナラス又大夫家老ナル

モノアリテ其政ヲ執リ之ヲ專ニス夫レ此ノ如  
シ相家ノ專横以來明治維新ノ際ニ至ルマテ時  
或ハ小康アリト云ヒ之ヲ要スルニ專政武治ニ  
過キヤレハ社會ノ眞利眞々ノ中ニ消滅シ民人  
ノ有様殆ント名状スヘカラサルモノ多シ是レ  
即チ第四ノ大敗落ヲ政治上ニ現セシ一大原因  
ニシテ所謂ハ第四大敗落トハ吾人カ現ニ目撃  
スル所ノ明治ノ今日ヲ云ヒ年ヲ經ルコト未タ  
十載ニ滿スト云ヒ其間百物ノ進歩ヲ促シ特ニ  
政治ノ如キハ其方向ヲ代議ノ体裁ニ注キ行



其完全ヲ致サントスルカ如シ是レ宇宙ノ文化  
ニ誘導セラレ之ヲ致スモノナリト管氏我后ノ  
仁慈盛徳アリテ之ヲ徳恵スルニアラスニハ馬  
ニノ能ク茲ニ至ンバ余ハ既ニ第一章、於テ本  
邦立憲ノ萌芽ノ美妙ニ發生シタル有様ヲ説ケ  
リ故、今再ヒ之ヲ贅セスト管氏此政治ノ方向  
ヲ温順ニ誘導南疏シ不祥凶惡ノ事無クシテ能  
ク代議政体ノ真海ニ達センコトコソ寔ニ冀願  
ノ至ニ堪ヘサルナリ故ニ再三々四之ヲ復言シ  
テ尚ホ止マサルナリ

人アリ余ヲ詰ツテ曰ク若シ本邦ニ於テ代議ノ  
政体ヲ用キントナレハ畏ユクモ王家ヲ如何セ  
ント余一闡愕ヲ曰ク是何ト云コトソ既ヒ代議  
ノ政体ヲ用キテ民人ノ公益ヲ傳ラントスルモ  
施政ノ全權ニ至リテハ必ス之ヲ一人ノ手ニ委  
シ其施行ノ便宜ヲ得セシメサルヲ得ス是レ古  
今ノ經驗ニ於テ既ニ不容異議ノ題業トナリ  
吾人モ亦大ニ之ヲ然リト為スモノナレハ万一  
本邦ニ王家ノ有ル無カラシムルモ吾人若シ代  
議ノ政ヲ用キトナレハ施政ノ全權ヲ委スル



為ノ必ス一ノ帝<sup>主</sup>王ヲ撰テ之ヲ立テサルヲ得サ  
ルモノナリ然リ而シテ吾人今幸ニ三千年ノ久  
シキ此万世一統ノ帝王ヲ戴キ加ルニ祖宗列聖  
臨御ノ宸旨ハ實ニ一人ニ奉セスシテ万生ノ為  
ニスルニアレハ吾人如何ソ施政ノ大權ヲ以テ  
之ヲ我カ后ニ委シ奉ラサラレヤ又之ヲ奉テ万  
世不易ノ帝王タラシムルハ我輩蒼生ノ大幸ニ  
シテ吾人安寧ノ為メ深ク之ヲ尊崇遵守スヘ  
キモノナリ果シテ此ノ如シ故ニ代議ノ政体ハ  
王家ニ一二ノ損害ヲ為サ、ルモノト知ルヘシ

夫シ然リ代議ノ政体ハ本邦ニ適合セルモノニ  
シテ之ヲ用ユルモ斐シテ駁議アルコトナカルヘ  
シ而シテ若シ之ニ類スルモノアレハ夫ノ熟知  
ノ尚早説ニ過キサルヘケレハ余ハ本章ノ末ニ  
於テ具答辨ヲ作り読者ノ一讀ヲ乞ハヒトスル  
者アリ

既ニ前言ヲ叙スト余モ尚ホ未タ自カラ安セス  
更ニ之ヲ考察スルニ余ハ又皇統一系ヲ万世ノ  
後ニ保持スル為メ代議政体ノ必用ナル所以ヲ  
查出セリ是レ前説ヲ確實ナラシムル為メ必ス



欠クヘカラサルモノナレハ余ハ之ヲ筆記スル  
ヲ情ヲサハスリ抑モ神器ヲ覬覦スハカラサル  
ハ大日本帝國ノ大法ニシテ苟モ之ヲ犯セハ之  
ヲ誅罰シテ敢テ假スコトナキハ本邦ノ慣例ナ  
ルノミナラス我后ノ仁徳能ク人心ヲ收攬スル  
ニ足ルハ今ヨリ万世ノ後敢テ此非望ヲ心ニ抱  
キ王室ヲ危ラセント謀ルモノ万々ナカルヘシ  
ト虽モ愚民慢リ、自由ヲ欲スルノ餘リ或ハ誤  
テ佛人ノ覆轍ヲ今日ニ蹈ミ巴黎滿城ノ慘毒ヲ  
我カ東京ニ現出スルナキヲ保シ難シ吾人若シ

斯等ノ不幸アルニ過ハ、既レ利ルボシノ是シ  
キ無クモ上ハ王室ノ不利ヲ致シ下ハ随テ我々  
カ福祉ヲシテ英雄ノ占拠スル所トナラシムヘ  
シ是レ誠ニ恐ルヘキノ一事ニシテ邦人輕躁ノ  
性アル實ニ其無キヲ保スル難シ故ニ佛蘭西ノ  
鑑ヲ照シテ其弊ヲ未癸ニ防クハ方今政治ノ要  
務ニシテ代議ノ政治ヲ採用スルカ如キハ其一  
ナリ蓋シ代議ノ政ヲ用テ徐ニ參政ノ權理ヲ民  
人ニ与ヘハ慢リニ自主ヲ欲スルノ已レニ不利  
ナルヲ知ラシメ能ク冥々ノ中ニ在リテ夫ノ慘



毒ヲ防禦スルヲ得シハナリ余故ニ曰ク代議政  
治ヲ採用セハ皇統ノ一系万世ノ後ニ保持シ易  
シト敢テ妄語ヲ爲ルニ非ラザルナリ果シテ此  
ノ如シ故ニ前段ニ所謂ル或人ノ疑問ハ愚慮ノ  
尤ナルモノニシテ畢竟憂フヘキコトニ非ラザ  
ルナリ

既ニ王室ノ存在ニ於テ惻然スル所ナクハ代議  
ノ政体ヲ本邦ニ採用スルモ必ス之ヲ非難スル  
モノナカルヘシ世若シ之アラハ夫ノ大熟ノ駁  
論ナル尚早ノ一説ニ過キサルノニ是ニ於テ乎

余ハ尚早ノ駁論ヲ分析シテ其辨ヲ作ラサルヲ  
得ス尚早ノ説ニ曰ク邦人今日ノ有様未タ代議  
ノ政体ヲ用ユヘカラスト今他ノ語詞ヲ以テ之  
ヲ言ハレニ即チ曰ク邦人ハ未タ代議ノ政体ヲ  
願ハス又之ヲ永久ニ維持スルノ能ナシ又代議  
政治ノ要旨ヲ充ス為メ其要務ヲ尽ス能ハスト  
ナリ或人嘗テ此三條ノ難問ニ對答ノ辭ヲ造テ  
曰ク我々ハ士族及ヒ高貴ノ富メルモノヲシテ  
其代議員ヲ撰ハシメントス惟フニ士族及ヒ富  
高貴農ハ其智既ニ代議ノ政ヲ願フニ足り其地



位以テ他ノ二大要件ヲ尽スニ足ラン新紙上民  
撰議院論ノ多キハ蓋シ其一斑ナリト此辨々淺  
疎ニシテ深密ナラサレハ未タ之ヲ以テ夫ノ尚  
早ノ説ヲ充分ニ醒服セシムルニタラサルナリ  
蓋シ夫ノ太熟ノ説ハ孫兎氏ノ成説ヨリ出テ未  
リタルモノニシテ其世ニ勢力アルコト頗ル強  
大ナレハナリ故ニ余ハ今輕々ニ辨ニ去ルヲ欲  
セス宜シク逐條吟味シテ之カ辨ヲ作ルハニ第  
一條邦人ハ代議ノ政ヲ願ハストハ何等ノ現状  
ヨリモテ之ヲ決論セシヤ余ハ却テ其反對ノ状

態アルヲ見ルノニ抑モ邦人ハ現時ノ地位ハ何  
等ノ度級ニ居ルモノ乎深ク極メサレハ未タ斷  
言スヘカラサルモノアリト當ニ其遠ク州味ノ  
弟倍ヲ離シ野蠻ノ陋習ヲ脱シタルハ人々ノ既  
ニ許ス所ニシテ寧ロ文明ノ第幾級ヲ占ムルモ  
ノト謂フヘキ也故ニ今日ノ邦人ハ既ニ師父ノ  
政ヲ以テ之ヲ支配スルヲ要セス又專制ノ治ヲ  
以テ之ヲ御スルヲ用キス吾此等ノ政体ヲ以テ  
之ヲ治スヘカラサルモノナリ是レ邦人ノ智覺  
既ニ自治ノ喜フヘキヲ知ルニ足ルモノアリハ



ナリ是ヲ以テ人情ノ常則ヨリシテ之ヲ推セハ  
邦人誰カ其參政ノ權ヲ願ハサラン 縦トヒ若シ  
之ヲ願ハサルモ之ヲ拒ムモノナキハ理ノ尤モ  
見易キモノニシテ誰カ復之ヲ非難セシヤ果シ  
テ然ラハ邦人ノ代議ノ政ヲ願フハ多辯ヲ用井  
スシテ明カニスヘキモノニシテ世若シ之ヲ願  
ハサルモノアラハ是亞細亞ノ陋習ニ眩惑セラ  
レテ未ダ代議ノ政体アルヲ知ラサルモノナル  
ヘシ 第二條邦人ハ未ダ代議ノ政体ヲ永久ニ維  
持スルノ能ヲ有セストノ駁案ハ第一條ニ比スレ

ハ稍々緊切ニシテ邦人ノ其能力ヲ有スルヤ否  
ニ至リテハ世間難決ノ一問タリト吾氏今余レ  
人情ノ常則ヲ推シテ之ヲ断スルニ邦人ニシテ  
既ニ代議ノ政ヲ願フノ智覺アルヲ推知スヘケ  
レハ均シク之ヲ推シテ其之ヲ永久ニ維持スル  
能力アルヲ知ルヘキモノナリ且ツ夫レ饒トヒ  
若シ邦人ヲシテ其能力ニ乏シカラシムルモ之  
ヲ願フノ智覺アラシメハ之ヲ培養シテ成長セ  
シムルハ志士学者ノ職務ニシテ民人ヲシテ苟  
モ參政ノ香味ヲ知ラシメ深ク其脂義ナルヲ慕



ハシメハ之ヲ勸ムル太甚々難事ニアラサルナ  
リ果シテ然リ第ニノ駁論モ亦難辨ノモノニア  
ラサルナリ第三條邦人ハ代議ノ政体ニ於テ民  
人ノ尽スヘキ職務ニ當ルノ能尚ホ未タ充分ナ  
ラストハ駁論中ノ最モ勢力アルモノニシテ邦  
人ノ多部現ニ身屈ニ安ニシ屬隸以テ自カラ甘  
スルノ姿アルヲ以テ見未レハ或ハ然ルモノア  
ルハシ然リト告ニ斯ハ武門壟制ノ餘毒ヲ蒙ル  
モノニシテ勢力之ヲ脱シテ彼ノ自治ノ精神ヲ充  
分ニ發達セシメサルヲ得サルモノナレハ今日

人民ヲシテ參政ノ權理ヲ得セシメ次第ニ其能  
カヲ教養セシコトゴソ方今急務ノ一端ナリ豈ニ  
其能ナシト云ツテ之ヲ擲抛スヘケンヤ蓋シ惟  
フニ政ハ活物ナリ故ニ之ヲ教養スル又死物ナ  
ル書冊ニノミ之レ依テ自カラ足リトスヘカラ  
ス必スヤ其実行ニ於テ大ニ之ヲ教育スヘキナ  
リ今余レ歴史ニ執テ歐人ノ嘗テ經驗ミタル政  
治ノ道途ヲ案スルニ大抵皆武治抑制ノ荖界ヲ  
經過シ其慘毒ヲ受テ未ラサルモノナレ是蓋シ  
人文ノ進途ニ於テ人類ノ避クヘカラサル一大



利所ナレハ其障礙ヲ受ル独リ邦人ニ止マラサ  
ルヲ見ルヘシ果シテ然ラハ此障礙アルニ依テ  
邦人ハ進途ニ難キモノト速断シ之ヲ擲施スヘ  
キモノニアラサルナリ况ンヤ吾人既ニ武治抑  
制ノ利所ヲ経過シタレハ行々回来ノ疲労ヲ醫  
シ其本原ニ復スルコリ方今急務ノ第一ナルモ  
ノナリ勢カ此ノ如シ故ニ第三ノ駁論モ亦雷同ス  
ヘカラサルナリ今之ヲ要スルニ代議ノ政ヲ今  
日ニ布クハ或ハ其弊害ナキヲ保シ難シト云  
之ヲ以テ将来ニ確收スヘキ利得ノ数ヲ以テ相

比準スルニ其大小輕重豈ニ膏肓壞ノミナラシ  
故ニ寧ロ今日ニ少害アルモ之ヲ設ケ以テ他日  
ニ大利ヲ占メサルヲ得サルナリ蓋シ人間ノ事  
万般ノ多アリト云モ其中咸ク是ニシテ咸ク善  
ナルモノアルコトナレ必ヤ茲ニ得アルハ茲ニ  
失アリ茲ニ利アルハ茲ニ害アルモノナリ故ニ  
利ノ大得ノ多クシテ害ト矢トノ少ナキモノヲ  
擇ヒ之ヲ善事ト做シ行フコトコリ真利ノ旨ニ  
称フモノナリ今惟ルニ政ノ術真利ノ外ニ求ム  
ヘキモノナレ故ニ事真利ノ旨ニ称フアラハ之



ヲ断行ニテ狐疑スルナキハ抑モ是レ為政ノ一  
大浴ナル哩ナリ



